

人々が関わり続けるプラネタリウム

— オリジナル番組制作を軸に

山梨県立科学館

高橋 真理子

1 はじめに～プラネタリウム番組とは

プラネタリウムは、地球上の生命すべてにとって“共有の風景”である「星空」と、現代科学が解き明かした「宇宙像」を中心に据え、丸い天井と暗闇、映像・音響設備をかねそなえた独特な空間である。広大な宇宙の中での地球を眺め、私たちがみな“宇宙内存在である”ことを体感できる場ともいえる。

この空間を活かす運営方法は、施設によって千差万別であり、解説者がライブで話をする「生解説」を主流とする館や、「プラネタリウム番組」の上映をする館もある。この「プラネタリウム番組」とは、星空・映像・音楽・ナレーションが総合演出された作品のことを指し、20分～45分ぐらいの長さの作品を上映している館が多い。20分程度の番組とその日の星空についての生解説を組みあわせて一つの投影とする館も多く、筆者のいる山梨県立科学館も、一般投影としてはそのスタイルが主流であるが、番組と生解説が一体化したようなもの、生解説のみのもの、など目的に応じて使い分けている。

本編では主に「プラネタリウム番組」の制作と投影について、当館での実践例をとりあげながら、プラネタリウム空間の可能性について考えたい。

2 山梨県立科学館のプラネタリウム番組

山梨県立科学館は、平成10(1998)年7月に開館して以来、オリジナル番組を制作・投影してきた。これまで制作した番組は平成24(2012)年4月時点で63作品にのぼる。当館の番組の特徴を以下にあげる。

- ①ふだんプラネタリウム解説をしている職員が、番組の脚本・演出・プロデュースをしている。
- ②「天文学」という学問領域にとどまらない、幅広い分野と星のつながりをテーマにすることが多い。(当然、天文学も多く扱う)
- ③他の館で上映していただくことも多い。
- ④ある一定の予算をかけた番組制作とは別に、市民グループが手作りで制作・投影(夏休中のみ)している番組もある。
- ⑤ユニバーサルデザインに向けた試みもしている。

これまで制作してきた番組テーマをあえて分類すると、天文、宇宙探査、地球惑星圏、地質、歴史、民俗、ファンタジー、人物、文学といったジャンル

になる。切り口は多様にあるが、一貫したテーマは「人は何故星をみあげるのか」である。そんなテーマのもと、経験から得た制作コンセプトは以下のようなものがある。

- (a)星と人と多分野を「つなぐ」。
- (b)見る人の経験を「引き出し」、その経験と番組の内容が「つながる」ように仕掛ける。
- (c)番組制作に、山梨の人たちを「巻き込み」、互いに「つなぐ」。
- (d)星空・ドーム空間・暗闇を生かし、見る人たちが、「想像する」余地を十分につくる。
- (e)番組自体が人々のコミュニケーションや行動を生み出せるような深いテーマをもつ。

これらはすべて、「人は「関わる」ことで主体的で自由な学びを生み出せる」という考えからスタートしている。このコンセプトからどのような番組が生まれ、そして育ってきたか、以下に例を紹介する。

3 星と異分野をつなぐ番組

どの時代、どの場所においても人々は星を見上げてきた。その点において、「星」はどんな分野ともつながりを見出すことができ、そのつながりはあらたな発見を生む。その気づきを多くの人に与えた番組の代表的なものが、「戦場に輝くベガ～約束の星を見上げて」である(図1)。戦時中に爆撃機などが天文航法(星の高さを測って機位を決める手法)を使っていたということ、また天文航法のために必要なデータを勤労動員女学生たちが計算をしていたということ、この事実に基づきながら物語を制作した。

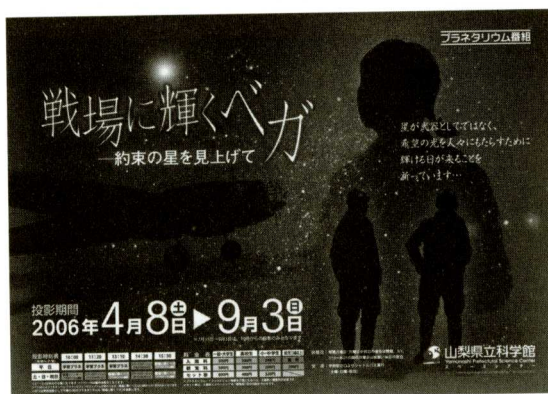


図1 戦場に輝くベガ

